

学問と宗教の相剋

ヤン・ポトツキ『サラゴサ手稿』（1810 年版）をめぐって

畑 浩一郎

はじめに

ヤン・ポトツキの『サラゴサ手稿』が読者に投げかけてくる数多くの問いかけの中に、学問とその意義にまつわる問題があることは間違いない。学問は果たして人間を幸福にする道具となりうるのか、新たな知見の獲得は人類の向上につながるのか、学問と宗教、とりわけキリスト教は両立しうるのか。これらの問題は小説内のさまざまな箇所、形を変えながら繰り返し提示されている。18 世紀から 19 世紀へと移り変わる変動の時代、啓蒙主義と、その間接的な結果であるフランス革命、そしてそれらがフランス社会、さらにはヨーロッパ全体に巻き起こした混乱。その帰趨が未だはっきりと見えない時代に、ポトツキが学問という営みに関してめぐらせたさまざまな考察を『サラゴサ手稿』の記述の中に探ることが、本論文の目的となる。

この問題を論じるにあたっては、小説内における「学問」というテーマの現れ方に注意を払わなければならない。学問にまつわる言説は、主に次の 3 つの異なる位相で確認される。すなわち、登場人物のレベル、物語のレベル、そして論考のレベルである。登場人物のレベルというのは、実際にこの小説には何人かの「学者」が登場し、彼らが他の登場人物たちと言葉を交わしたり、自分の意見を述べたりするということである。物語のレベルというのは、この小説には学者が主人公となる物語がいくつか見られるということである。ここで直ちに指摘しておかねばならないのは、『サラゴサ手稿』はいわゆる枠物語の構造を取っており、主人公アルフォンス・ヴァン・ウォルデンの 61 日にわたる旅日誌という大枠の中に、さまざまな物語が入れ子状に組み合わせられて挿入されているということである。『サラゴサ手稿』が内包する数々の物語の中に「ディエゴ・エルバスの物語」や「エンリケ・デ・ベラスケスの物語」、さらにその息子である「幾何学者ベラスケスの物語」といった、学者の半生がテーマとなる物語、それもかなりの長さや内容的な豊かさを持つ物語が見受けられるのである。最後に論考のレベルというのは、第 5 デカメロン末尾、第 48 日、49 日、50 日と、3 日間を費やして開陳される「ベ

ラスケスの体系」のことを指す。この「体系」は小説の他の部分とは独立した、全く異質な言説となっている。ここでは極めて学術的な、だが同時に奇想天外ないくつかの「学説」が展開されることになる。

『サラゴサ手稿』における学問の取り上げられ方について考察した研究は、すでにいくつか存在する。主だったものだけを挙げると、「ディエゴ・エルバスの物語」を扱ったナタリー・ヴィユマンの論文¹、幾何学者ベラスケスという人物について、精神分析的手法を用いて論じたマキシム・ガベラの論文²、さらに『サラゴサ手稿』の3つの草稿を比較しながら、幾何学者ベラスケスの小説内での役割の変化を追い、さらに「体系」の分析にまで踏み込んだドミニク・トリエールの研究³などである。これらの先行研究はいずれも、本論文で扱うテーマがいかに豊潤な問題をはらんでいるかを示す指標となるわけだが、その一方で、このテーマを網羅的に論じ尽くすことの難しさをも示唆している。そこで本論文では、幾何学者ベラスケスにまつわる問題に議論を限定することにする。彼について、まず登場人物のレベルでの考察をいくつか行い、その上で彼の展開する独自の学術理論である「ベラスケスの体系」の内容と文体について論じていくことにする。その際には、ポツツキと同時代の知識人たちが、学問について、とりわけ学問と宗教の関係についてどのように考えていたかという視点も必要となるはずである。ここでは主にヴォルテール、ルソー、そしてシャトーブリアンの考えを取り上げながら、この問題に関するポツツキの独自性を炙り出していく。

幾何学者ベラスケスをめぐる問題

相矛盾する性格

『サラゴサ手稿』執筆の最初期から作者の構想の中にあった幾何学者ベラスケスは、疑いなく、この小説で最も重要な登場人物のひとりである。最終版となる1810年版では、彼の登場は、それまでのバージョンと比べて大幅に

¹ Nathalie Vuillemin, « Les mélancolies du savoir : la confrontation entre science et réalité dans *Manuscrit trouvé à Saragosse* de Jean Potocki », in *Entretiens sur le Manuscrit trouvé à Saragosse*, éd. François Rosset, Paris, Études de Lettres, 2012, p. 59-78.

² Maxime Gabella, « Géométrie et libido dans le *Manuscrit trouvé à Saragosse* (version de 1810) », in *Entretiens sur le Manuscrit trouvé à Saragosse*, op. cit., p. 79-96.

³ Dominique Triaire, « Il était trois fois un géomètre... », in *Jean Potocki ou le dédale des Lumières*, éd. François Rosset et Dominique Triaire, Montpellier, Presses universitaires de la Méditerranée, 2010, p. 349-384.

後ろ倒しにされ、小説の後半の第 41 日になってようやく姿を現す⁴。初登場時から、彼は、ある種の変わり者、少なくともその正体が掴み難い人物として提示されている。この小説の他の登場人物たちと同様、ベラスケスもまた、ゾトの兄弟の絞首台の下で寝ているところを発見されるのだが、意識を取り戻すやいなや、ひたすら覚書帳に何やら計算式を書きつけ始める。彼を見つけた人たちの意見も一定せず、ある者は彼を「幾何学者」と断じ、またある者は「悪魔つき」と、そしてまたある者は「変人」とみなす⁵。実はベラスケスは、数学、とりわけ幾何学に対して並々ならぬ熱意を抱いており、常日頃から、覚書帳に数々の数式や記号を書きつけるということを習慣としているのである。学問の中でもとりわけ抽象度の高い幾何学への取り組みは、彼の現実世界への関心を希薄にしてしまう。その結果、彼の振舞いは時として奇矯なものとなり、周囲の人々の目には、胡散臭いとまでは言わないまでも、少なくともアイデンティティの不明瞭な人物として映ることになる。

実際、幾何学者ベラスケスの人格は独特で、ふたつの相反する性格を有した人物として描かれている。ひとつには、常人には到底得難い広範で豊かな学識と、類い稀な思考力と計算力を備えた、第一級の頭脳の持ち主ということがある。彼は小説に登場した当初から、いきなり火山についての恐るべき知識を開陳して、他の登場人物たちを驚かせている (414)。彼の学識は幾何学や精密科学だけにとどまらず、歴史や死語の領域にまで及ぶ。いずれその内実は「ベラスケスの体系」として、読者を驚かすというか、むしろ面食らわせることになる。もうひとつの性格は、極端なまでの粗忽者ということである。計算に夢中になるあまり、自分が持っている鉛筆をペンと勘違いし、それを無意識にレモネードのコップに浸すなどというのはまだ序の口である。誰かに話しかけられても、その言葉の最後の数語しか耳に入らないし、それに対しても数時間経ってからようやく見当違いの答えを返すことになる。彼自身が諦めをもって告白している (477)。また時として彼は自分の名前すら思い出せなくなることもある。それゆえ彼は自分の名前を常に覚書帳に書いておき、署名をすることが求められるたびに、それを書き写すということを経験している (448)。

⁴ 『サラゴサ手稿』には、1794 年版、1804 年版、1810 年版と 3 つのバージョンがある。いずれも内容、構成の面で大きく異なるが、本論文では物語が完結している最終の 1810 年版を扱うことにする。

⁵ Jean Potocki, *Manuscrit trouvé à Saragosse* (version 1810), in *Œuvres*, IV, 1, éd. François Rosset et Dominique Triaire, Paris, Peeters, 2006, p. 411. 今後、『サラゴサ手稿』の引用はこの版から行うことにし、該当箇所の末尾にページ番号を付す。

これらのふたつの相矛盾する性格は、一体どのようにして彼の中で両立しているのだろうか？ おそらくそこには、アイザック・ニュートンに対する暗示を読み取る必要がある。万有引力を発見したこの世紀の大学者はまた、卵と間違えて時計を茹でてしまうような粗忽なところもあった⁶。またこの後に考察するように、幾何学者ベラスケスとニュートンの間にはまた別の共通点もある。それは自然科学だけではなく、キリスト教に対する強い関心を抱いているという事実である。ただしベラスケス自身について言えば、逆説的ながら、自らのうっかりした性格について、彼なりに「論理的な」説明をつけていることにも着目しよう。すなわち彼によれば、自分の持つ広範な知識を整理するために、頭の中を本棚のようにしているのだが、何かを尋ねられて答えなければならない時に、その中からどの本を選べばいいのか迷ってしまい、結果的にぼんやりしているように思われてしまうのだという。またベラスケスによれば、一般に人々の会話のスピードはあまりに速すぎるのだともいう。彼らが話題を次から次に変える様はまるで、全速力で駆けさせている馬から馬へと飛び移るヌミディア人のようだという。確かに論理的な思考をするためには、もっとゆっくりとしたリズムが必要であろう。ベラスケスはそれを、チェスをするのに手紙を使った人たちの態度になぞらえる。つまり一手進めるためには、郵便配達が来るのを待つ必要があるのである（490）。

ベラスケスは、自然界のあらゆる事象に幾何学を当てはめ、数学的に説明しようと試みる。彼の幾何学的考察から逃れうるものは、この世には何もない。人間が抱く揺れやすく不確かな感情、その中でも最も理屈にそぐわないもの、すなわち人を好きになる心、恋愛についてすら、ベラスケスにかかれば、見事に論理的に説明される。それは乗法や除法を用いた計算式に即して証明されることもあれば（419-420）、またクレオパトラをめぐる、カエサルとマルクス・アントニウスの運命の相違のように、ベクトルを使った平行四辺形の問題として解説されることもある（437-438）。ベラスケスによれば「ドン・アイザック・ニュートンが考え出した二項定理の公式は、あらゆる計算の導きとなるのと同様、人間の心の研究においても私たちを導いてくれる（420）」のだという。また、トレス・ロベラス侯爵の数十年にわたる波乱万丈の生涯についてベラスケスがしてのける幾何学的分析の切れ味につい

⁶ フィリップ・グローズは、星空の観察に夢になるあまり、溝に落ちてしまった古代ギリシアの哲学者タレスの例を挙げている。Voir Philippe Grosos, « Jean Potocki ou l'expérience de l'intotalisable », in *Entretiens sur le Manuscrit trouvé à Saragosse*, *op. cit.*, p. 18.

ては、ただただ舌を巻くより他ない。侯爵がスペインにいた頃の、幼馴染エルビラとの恋愛とふたりが結婚にいたるまでの道筋、それから結婚生活が破綻し、舞台を新大陸メキシコに移してから、カシーケの娘モンテスマ侯爵夫人との崇高でありながらも絶望的な恋模様、最後に晩年になってからのある少女との心温まる小さなエピソード、これらすべてがベラスケスによって、楕円の軌道を用いて説明されるのである（445-447）。

こうした森羅万象ありとあらゆる事柄を数式によって解析しようとする考え方は、かつてデカルトが考案し、その後ライプニッツが発展、伝播させた普遍学、マテシス・ユニヴェルサルス（*mathesis universals*）に由来する。理論に対する絶対的な信頼を根底に持つこうした唯物論的合理主義は、18世紀以降、近代科学の成立に貢献していくわけだが、その反面、現実世界から遊離し、空疎な机上論につながっていく危険性をもはらんでいる。人間の心の問題を含めたあらゆる事象が数式に還元できるなどという考え方は、子供でも一笑に付すナイーブさを持っている。ベラスケスが振りかざす、極端なまでの幾何学への信頼には、作者ポトツキの学問に対する冷笑的な皮肉を見て取るべきであろう。またその一方で、こうしたベラスケスの考え方にはある種、反宗教的とまではいかなくとも、少なくとも理神論的な要素が含まれている点にも注意しなければならない。神が創造したとされる世界の事物が、人間が考え出した論理によってすべて説明できてしまうのであれば、そこにはもはや奇跡や神秘などというものが介在する余地はない。理性と信仰の関係という、本論でこれから論じていく問題の一端がすでにここに垣間見える。

恋する幾何学者

果たして幾何学者ベラスケスは呪われた無神論者なのか、それとも世間に背を向けた科学の盲目的信奉者なのだろうか。ひとつ確実に言えることは、彼は決して人の気持ちの分からない冷血人間ではないということである。それどころか豊かな感受性を持ち、女性に恋をすることすらできる人間的な人物である。彼の恋心が向けられる相手は、ユダヤ人の血を引くレベッカである。その思いの告白も、幾何学者らしく数学用語を用いたものとなる。「お嬢さん、今朝はあなたのことをずっと考えていました。でもお名前が分からないので、あなたのことを x か、 y か、 z で呼びしなればなりませんでした。未知数についてはそうした記号を使うものなのです」。そしてレベッカの本名がラウラ・デ・ウゼダというものであることを聞かされると、ベラスケスは次のような数学的な喜びをあらわにする。「ラウラ、物知りのラウラ、

やさしいラウラ、美しいラウラ、こうした数値を足していくと、あなたの総和の値が出ますね（421）」。そしてこの後、1日が終わるたびに、ふたりは今聞いたばかりの物語について、数学用語を用いて意見を交わしあい、次第に仲を深めていく。幾何学は、その無機質な印象とは裏腹に、ふたりの男女の間を取り持つ恋の架け橋となるのである。

だがベラスケスは本当に、女性としてのレベッカに好意を寄せているのだろうか？ むしろ彼女の学問を理解する能力を高く評価し、同じ抽象理論を操る学者として同族意識を感じているのに過ぎないのではなからうか。ニュートンが提示した3つの物体の問題についてのレベッカのコメントを聞いたベラスケスは、うっとり彼女のことを眺め、次のような言葉を発している。

そうなんです、かわいいラウラ、あなたは完全に正しいのです。こうした計算はあなたにこそふさわしいでしょうね。巧みな積分を使えば、二階級微分を、他のもっとよく知られた微分に還元することができます。同時に、あなたの方程式を厄介なものにしているより小さな値をうまく無視することもできますよ。でもあなたのお話を聞いて、私は本当に賞賛の念を禁じ得ません（438）。

高度な学術議論はこうして、それを理解することのできる特権的な個人を緊密に結び合わせる紐帯の役割を果たす。だが裏を返せば、それはまた学問という、世間から隔絶された場に生きる人間たちの孤独をも暗示している。その証拠に、ベラスケスとレベッカの交わす会話についてくることのできる人間はふたりの周りには皆無である。「だが残りの者たちは、皆、学者というわけではないので、会話はすぐにもっと打ち解けたものになっていった（415）」。学問は、それに関わる人間と関わらない人間をより分ける、強力な選別装置となる。

それゆえ当然、女性であれば誰であれベラスケスの心を惹くというわけでは全くない。レベッカに対する恋心はむしろ例外的なことのようと思われる。それを裏付けるかのように、継母であり叔母であるアントニアから誘惑されても、彼はそれに乗る気配をまるで見せない。逆に誘惑が引き金となって、以前にもまして学問へのめり込んでいく始末である。アントニアは計3度、ベラスケスを誘惑している。1度目は、対数計算に取り組んでいる彼の部屋に入ってきた彼女が半裸になり、甥の目を両手でふさぐと、計算を続けるようにと言う。こうした戯れの手管に対し、ベラスケスは数学者として応える。つまり叔母の言葉を自分に対する挑戦と捉え、記憶の中にある対数表だけを頼りに、敢然と計算に挑むのである。彼の朴念仁ぶりに業を煮やしたアント

ニアは「幾何学者のばか者め！」という言葉を投稿つけるのだが、ベラスケスはそれを自分の解法についての評価と見なし、納得することができない（471）。2度目も似たような構図を取る。アントニアから「子供の作り方を知っているか」と問われると、ベラスケスはそれを自然界で行われている繁殖のあり方についての問いかけ、「杉の木から地衣類にいたるまで、鯨のような大きな動物から、顕微鏡でないと見えないような微小生物にいたるまで、あらゆる生物が行なっている繁殖形態についての全般的な考え方」が問われているものと解釈するのである（472-473）。

幾何学者を誘惑するには、通常の恋の言葉では通用しない。むしろ無機質とも言える数学的問題が必要となるのである。それを裏づけるのが、3度目の誘惑である。故郷のセウタからマドリードへ向けて旅をするベラスケスは、途中、ベンタ・ケマダというシエラ・モレナ山脈の山中にある宿屋に宿泊する。真夜中の鐘が鳴ると同時に、叔母のアントニアが侍女のマリカを連れて入ってくる。ベラスケスの父に頼まれて『円積問題の証明』という書類を持ってきたというのである。ベラスケスは早速、解法に取りかかるが、いつものように頭脳を働かせることができない。そのうちに彼はアントニアとマリカの誘惑の術に落ちてしまう。「体のあらゆる表面、とりわけふたりの女性に触れている箇所、新たな感覚が生まれます。それは接触曲線のいくつかの特性を思い起こさせました。 […] とうとう私の感覚は無限上昇級数へと展開してしまいました（481）」。

だがこのアントニアとマリカの勝利は、必ずしもエロスのマティマチカに対する優位を意味しない。むしろふたりの不可思議な登場の仕方を含めて、ここではベンタ・ケマダという『サラゴサ手稿』全体を覆う結界の力が及んでいると見るべきである。

無限と聖性

精密科学、中でも幾何学の追求を人生の目的かつ生きがいとするベラスケスの態度は、実は父親譲りのものである。ベラスケスの父エンリケもまた、学問を追求した挙げ句、人生の幸せをつかみそこなった人物である。ここでは詳述できないが、彼は重要な書類に、自分の名前の代わりに誤って弟の名前を署名してしまったがため（先述のベラスケスの名前に関するエピソードは実はこのことに由来する）、恋人と財産と地位とを失ってしまい、セウタの岩山に隠遁しながら、ひとり孤独に自分の楽しみのためだけに学問に打ち込んでいる。そのエンリケが息子ベラスケスを授かったとき、赤ん坊を抱っこしながら、天に向けて次のような祈りを捧げている。

指数関数にとって無限性を持つ通約できない累乗よ、あらゆる増加数列の最終項よ、わが神よ！ あなたは今またこの世に、感じやすいひとつの存在を投げ出されました。もしこの子が、その父がかつてそうであったように、みじめな人生を送らねばならないのであれば、どうかこの子に減算の記号をつけてやってください（461）！

この数学的な祈りの文句に、字句的な滑稽さだけを読み取るのでは不十分である。エンリケは確かに半生をさまざまな学問の探究に費やしてきた人物であり、その染みついた「学者魂」がこのような言葉を彼に発せしめたのは間違いない。だがその文言をよく見ると、「無限性を持つ通約できない累乗（*Puissance incommensurable qui as l'immensité*）」であるとか「あらゆる増加数列の最終項（*dernier terme de toutes les progressions ascendantes*）」といった、物事の限界、あるいは究極を表す言葉が使われていることに気づく。そしてこれらの言葉は「わが神（*mon Dieu*）」と同列に置かれているのである。ここに、数学と信仰の接近を見て取ることができる。

微積分学は、17世紀末にニュートン、あるいはライプニッツによって考案されている。無限大や無限小といった概念を扱うこの数学の一分野は、当初から、人智を超えた、ある種、神の領域に属するものとして畏怖されることがあった。ヴォルテールは『哲学書簡』の補遺において、微分について「任意のどんな数量よりもさらに小さい数量を見つけることであり、その数量を無限回乗じると与えられた数量と等しくなる」と定義した上で、次のように述べている。「これほど大胆な建造物を前にして、それを建てたひとは恐ろしくなってしまった。ライプニッツはこれらの無限を呼ぶのに、比較できないもの（*des incomparables*）と言うのがやっとならった⁷」。ベラスケスの父エンリケが唱える数学的な祈りは、人間の頭脳が作り上げた知の体系が信仰という聖域に踏み込む瞬間、あるいは理性と宗教という2本の曲線が触れ合う究極的な接点を示しているのである。

そしてこのふたつの分野、すなわち数学と信仰とは、突き詰めていくと、最終的には同じ「不可知」という結論にたどり着く。幾何学者ベラスケスは幼少期、罰として閉じ込められた小部屋の窓ガラスの数を数えることで掛け算や面積の原理を発見してしまうのだが、その理解力を父は試そうとし、彼に次のような質問をする。すなわち、縦横それぞれ26のガラスに対し、下辺に2列増やし、なおも正方形を保とうとすると、いくつガラスが必要になる

⁷ Voltaire, *Lettres philosophiques*, in *Mélanges*, éd. Jacques Van Den Heuvel, Paris, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1961, p. 78.

かという問いに、少年ベラスケスは、縦と下の辺にそれぞれ2列で52枚、さらにその2列が交わる角で4枚のガラスが必要で、計108枚のガラスが必要だと答え、父を満足させる。さらに父は質問を変え、今度は下辺に無限小の線分を1本引くとなると、出来上がる正方形はどのようなものになるのかと尋ねる。ベラスケスは少し考えた後、次のように答える。「そうすると窓の両辺と同じ長さの列が2本得られますが、隅の正方形の方はというと、それも無限小ということになり、私にはそれがどのようなものになるか見当もつきません(469)」。幼いベラスケスがこの問題の解にたどり着くことができないのは、決して彼の数学的能力が不足していたからではない。むしろ彼はここで数の神秘、一見、比類なく論理的な体系に思われる数学という学問にも究極的には人知の及ばない領域が残されているのだということを直感的に見抜いているのである。

数学に携わる人間は、ほとんど神の領域に近づくことがある。無限という概念が媒介となって、人間には本来知ることのできない神秘を垣間見ることが許されるのである。だがそれと同時にまた、彼は別の「聖域」に接近することもある。それは人間のいやらしさや浅ましさを超越した、浄らかな存在として認識されることがあるということである。継母アントニアから誘惑を受けた幾何学者ベラスケスは、生物の生殖という問題に夢中になる。思考は頭をたぎらせ、呼吸も苦しくなる。居ても立っても居られず、彼は部屋を飛び出し、セウタの町を歩き回る。そのうちに彼は、知らない間に城壁の外に出てしまう。ふと気がつくと、彼はアラブ人の集団に取り囲まれている。セウタは北アフリカにあるスペインの飛び地で、常にアラブ人の襲撃に脅かされている。身代金を払うのでどうか命を取らないで欲しいと懇願するベラスケスに対し、アラブ人のシャイフは次のように答える。すなわち、おまえの奇行ぶりは我々アラブ人たちの耳にも届いているが、それは神がおまえから理性の一部を取り上げられたからなのであり、善悪の区別のつかぬ、頭のおかしい人間というのは、かつて無垢の状態にあった人間のようなもので、第一級の清らかさを持っていると言うのである。それゆえシャイフはベラスケスのことをマラブー、すなわちイスラームの聖者とみなし、身代金を取らずに、セウタの町へ連れ戻してくれるのである(473)。

このように学問に携わる人間は時として理性を失った者とみなされ、それを通じてある種の「聖性」を獲得することがある。学者というのは本来、苦勞して積み重ねてきた知識のおかげで、一般的な人間よりも優れた存在、知的な強者としてみなされるはずであるのだが、幾何学者ベラスケスの場合は

逆に、学問を究めたがゆえに、人間性に変質をきたしてしまった存在とされてしまうのである。だがアラブ人のシャイフによれば、それは決して不幸なことではない。彼は言う。「頭のおかしい人間というのは、神のお力と、人間の知恵の虚しさの生きた証拠なのだ」。ここで創世記の記述を想起することはそれほど場違いではあるまい。楽園の住人は知恵の実を食べたことによって不幸になる。だがベラスケスの場合は、学問の道を追求することによって、逆に浄らかで幸せな存在となるのである。何という辛辣な皮肉であろうか。だがベラスケスが失った代償は決して小さくはない。次の彼の言葉は、学問の道を歩む人間の抱える矛盾、すなわち進めば進むほど、逆に退行していくという不合理を示している。

何ということだ！ ロックとニュートンの後を追って、人類の知性の限界にまでたどり着いたはずだったのに。ロックの原則をニュートンの計算で支えることで、形而上学の深淵の中に確かな数歩の歩みを刻んだはずだったのに。その結果はどうだろう？ 頭のおかしくなった男と思われ、もはやまともな人間と呼べないような、愚かな存在と見なされているのだ。微分学だの積分学だのは、すべて滅びてしまえ。かつてぼくの栄光はそこにかかっていたのだが（474）！

ポトツキは、学問の意義や学者の人生について極めて懐疑的である。これは必ずしも幾何学者ベラスケスに限った話ではなく、『サラゴサ手稿』に登場する他の学者、ディエゴ・エルバスや、ベラスケスの父エンリケについても同じことが言える。まるで学問は人間に益をもたらさないどころか、逆に有害であると言わんが如くである。

同時代人たちの考え

ここでポトツキと同時代の知識人たちが、学問という営みに対し、どのような考えを抱いていたのかという点を確認しておこう。言うまでもなく 18 世紀は啓蒙主義の時代であり、理性による認識に基づいた客観的かつ合理的な世界観が追求された。その認識を支える基盤として学問があり、さまざまな分野で近代科学の礎が築かれることになる。さらに、こうした合理性の追求の営みは、当然、超自然的な「偏見」を排除するという方向を取り、宗教と激しく対立することになるはずである。『百科全書』は「学問、人間の知」（Sciences, Connoissances humaines）という項目で、次のように高らかと歌いあげている。「学問は間違いなく、最も偉大な天才たちの建造物である。そ

れによって、広大無辺な自然の神秘が私たちに明かされるのだ⁸」。ここで「明かされる」と訳した語は « dévoilée » である。それまで宗教がそのヴェールで覆い隠してきた自然の神秘は、まさに学問のおかげで白日の元に晒されるのである。

だがこのような学問に対する賛美が、当時の知識人たちに共有されていたかという、必ずしもそうではない。それどころか、逆説的にも、啓蒙主義を担う哲学者たちによって、学問はしばしば激しい批判的となっている。例えば先に引いた『百科全書』の言葉を、次のルソーの『学問芸術論』の一節と比較してみよう。「永遠の叡智がみずからのすべての働きを覆い隠していた厚いヴェールは、われわれがそうした空しい探求をするように定められてはいないということを警告しているようだ⁹」。ルソーにとって学問とは、奢侈、無為、傲慢を生み出すものであり、幸福を願う人間の生活から排除すべきものとされる。実際、学者によってもたらされたさまざまな知見、たとえば惑星の公転、幾何学、真空などについての知識によって、人間は果たしてより数が多くなったであろうか。よりよい政治を行い、繁栄し、またいっそう邪悪でなくなったであろうか。そのようなことは決してない。なぜならば、学問は「目指す目的において空しいものであるだけでなく、生み出す結果によってさらに一層危険なものである¹⁰」からだ。

ルソーにとって学問、あるいはそれに携わる学者が何よりも有害に思えるのは、それが祖国や宗教といった事柄を軽蔑し、「人間のうちにあるいっさいの聖なるものを破壊し、卑しめること¹¹」に向かうからである。ここで信仰の問題が出てくるわけだが、それはのちに見るシャトーブリアンの場合とは異なり、護教論的な立場からの議論ではなく、あくまで学問の対局にあるものに価値を見出すというものである。ルソーにとって、無学こそが大多数の人間の幸福に有益なものとなるのである。「われら祖父の知識と呪わしき芸術からわれらを救い給え。そして、われわれの幸福をつくり出し、神の前では貴重なものである唯一の善なる、無知と純潔と貧しさをわれらに返したまえ¹²」。学問に携わることが許されるのは、いくらかの限られた天才たち、

⁸ 以下のインターネットサイトから引用。Édition Numérique Collaborative et CRitique de l'*Encyclopédie ou Dictionnaire raisonné des sciences, des arts et des métiers* (1751-1772).

⁹ Jean-Jacques Rousseau, *Discours sur les sciences et les arts*, in *Œuvres complètes*, éd. Bernard Gagnebin, et Marcel Raymond, Paris, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », t. III, 1964, p. 15.

¹⁰ *Ibid.*, p. 18.

¹¹ *Ibid.*, p. 19.

¹² *Ibid.*, p. 28.

例えばベーコン、デカルト、ニュートンといった人々だけであり、それ以外の大多数の人間にとって、学問とは有害であるばかりか、危険な営みなのである。

時代が前後するが、ヴォルテールの場合は、また少し事情が違う。『哲学書簡』において、ヴォルテールはベーコン、ロック、ニュートンといった英国の哲学者、理論家について論じ、いずれも高い評価を与えている。とりわけロックの理路整然としつつも、謙虚な精神は彼の目に好ましく映った。ヴォルテールの考え方は、靈魂にまつわるロックの態度をめぐる言説に顕著に表れている。靈魂とは何か、靈魂は不死なのか、それとも滅びるものなのかといった、古代よりさまざまな哲学者たちが考えをめぐるしてきた問題に対し、ロックは判断を中止する。それは人間の理性では知り得ない事柄であるからである。「とにかくあなた方も私同様無知なのだと認めたらいかがです¹³」。

ヴォルテールの学問に対する考えは極めて理知的である。彼は理性を用いて真理に迫ること、すなわち近代的学問のあり方に必ずしも否定的ではない。だがそれに絶対的な信頼を置くのではなく、そこには限界があることを理解している。そして彼によれば、理性、ないし学問が到達し得ない領域を補うのは宗教である。「人間の理性は自分では靈魂の不死を立証するにはあまりにも無力なので、宗教がその不死をわれわれに啓示しなければならなかった。すべての人間に共通の利益が、靈魂が不死であると人が信ずるよう望んでいる。信仰がわれわれにそれを命じている。それ以上のことは必要なく、問題は解決済みなのである¹⁴」。ヴォルテールにとって、学問は必ずしも宗教と対立するものではなく、まったく別の次元のものなのである。それがしばしば混同されるのは、狂信が原因である。「神学者たちは、人が自分たちと同意でないときには、神が冒瀆されたとすぐに言い出すのである¹⁵」。ヴォルテールにとって、理性に限界があることを認めることこそ、すぐれて理性的な行為となるのである。

最後にロマン主義者シャトーブリアンの考えを見てみよう。『キリスト教精髓』の第3部において、シャトーブリアンはキリスト教と学問の関わりについて論じている。その論法は興味深い。おそらく彼の考えの前提には、学問と宗教とは相容れないという認識がある。まず彼は次のように宣言する。

¹³ Voltaire, *Lettres philosophiques*, éd. cit., p. 41.

¹⁴ *Ibid.*, p. 40.

¹⁵ *Ibid.*, p. 39-40.

「宗教を弁護するからと言って、自分は必ずしも知を攻撃しようというわけではない¹⁶」。その言葉通り、彼は何とか学問の意義を肯定しようと努めるのだが、その歯切れはよいとは言えない。キリスト教を絶対視する価値観が絶えず、彼の議論を左右するのである。その結果、彼の論理はしばしば単なる「屁理屈」に陥ってしまう。たとえば、教皇庁やソルボンヌ大学は、確かにしばしば学問上の新たな知見の発見を断罪してきたが、同時にそうした発見に好意的な文書をも公表したこともあったではないか。キリスト教が学問を迫害してきたというが、古代の立法者たちはどうだったのか。教皇グレゴリウス（グレゴリウス暦の発明）、ベーコン（望遠鏡を発明）などは、天文学の擁護者ではないのか。

このように護教論的な立場から、彼は学問の意義を評価するというよりはむしろ、信仰を擁護する側にまわるのだが、次第に彼のキリスト教信仰は、彼の筆を学問に対する批判へと向かわせていく。まず引かれるのはプラトンの考えであり、それによれば、高度な学問は万人に有益というわけではなく、まったくの無学の方が、消化不良の知識の積み重ねよりも好ましいというものである。シャトーブリアンは、この考えを裏付けるさまざまな知識人の言葉を連ねていく。数学の不確実性を指摘したホッブズ、哲学によって神への理解が損なわれると言ったベーコン、無知の自覚を説いたロック、それにニュートン、ギボン、デカルト、カステル神父、ビュフォン、コンディヤックが続く。そして学問というものがいかに空しい営みであるかが指摘された上で、彼の結論に達する。「不信心な時代は必然的に学問へと到達する。学問は必然的に不信心な時代をもたらす¹⁷」。シャトーブリアンにとって、学問とキリスト教の価値観とは水と油の関係にあるのである。

ベラスケスの体系

これまで学問と宗教の関係について、ボトツキと同時代の何人かの知識人の考えを見てきた。立場はさまざまに異なれど、いずれも両者の親和性はそれほど高くないという共通した認識があった。ここからは『サラゴサ手稿』

¹⁶ François René de Chateaubriand, *Génie du christianisme*, in *Essai sur les révolutions, Génie du christianisme*, éd. Maurice Regard, Paris, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1978, p. 803.

¹⁷ *Ibid.*, p. 812-813.

第5デカメロンの末尾に置かれた「ベラスケスの体系」を見ていくことで、この問題をさらに深く考察していきたい。

幾何学者ベラスケスによれば、学者の生涯には、まるで雷に撃たれたかのように、ある原理が脳裏に浮かび、その原理を敷衍することで独自の学説を構築することができるようになるような瞬間があるという。こうした瞬間には、学者はそれまでに持っていた知見をあらゆる角度から検討し直し、分類し、さらに欠けている知識を新たに獲得することで、全く新しい真実に迫ることができるのである。ベラスケスはそうして得られる真実を「体系(système)」と呼ぶ。ベラスケス自身の体系は大きく分けて、3つの部分から構成されている。まず第48日の途中から始まるものは、主に生命とは何かという問題を扱っている。無機物と有機物の違い、意思や思考とは何か、そして動植物と人間の違いなどが論じられる。次に第49日には、旧約聖書に書かれた天地創造の物語が、ベラスケス独自の理論で「学問的に」解説されていく。最後に、第50日では、天地創造以降、イエス・キリストの誕生にいたるまでの人類の歴史が、地表がその間どのように変化していったのかという問題と合わせて考察される。この3つの論考に共通するのは、さまざまな分野の学問の知見、生物学、天文学、数学、地質学といった自然科学から、哲学、歴史、言語学、年代記などに及ぶ人文学に至るまで、ありとあらゆる学識が動員されて、人類史の書き直しが行われているということである。

「ベラスケスの体系」の中核にあるのは、やはり第49日の天地創造の物語の学術的な解説である。これはある種、理神論的な世界観のパロディであり、同時にまた、学問と信仰、双方に対する壮大なる皮肉である。創造主であるエロヒムはどのようにして6日間をかけて、この世界を作り上げたのか、その顛末は、本来相互に関連を持たないはずの学問の知識が自由自在に駆使されて語られる。無論、その論考の立て方はキリスト教の観点から見れば異端以外の何物でもない。だが、たとえ信仰の問題から離れたとしても、この論考には内容面、また文体の点から、さまざまな危険な徴が見受けられる。ここでは「第1日」を例にとり、ポトツキの作り上げた世界観を見ていこう。

「はじめにエロヒムは天と地とを創造された。地は形なく、混じりあっていた。シャンシェクが淵のおもてにあり、エロヒムの息吹が水のおもてを揺り動かしていた(490)」。ベラスケスはまず、ヘブライ語の「シャンシェク」という言葉に注意を促す。彼によれば、これは本来「闇」を意味していたのだが、フェニキア人の書物を通してギリシア神話に入り、「混沌」を指すようになったという。つまりここでは歴史言語学と神話を用いて、世界の始ま

りにあった「混沌」とは何かという問題が説明されるのである。だがベラスケスは直ちに別の学問へと移行する。彼によれば「混沌」、すなわち「地が形なく、混じりあっており、水におおわれていた」状態であったことは、当初、地球が流体であったことを示しているのだという。流体は引力の法則にゆだねられると、球体を取る。それは葉の先にくっついている水滴を見れば分かるし、熱せられた水銀の粒が、何らかの物質の上に広がると丸くなることから分かる。つまりここではある種の物理学の知識が援用されているのである。

次にベラスケスは、「水のおもてを揺り動かしていたエロヒムの息吹」とは何かという問題の考察に移る。「息吹」と訳された「ルー」という言葉は、もともと「魂」や「命」を意味するということが指摘された上で、ベラスケスはマルタ島の住民のようなキリスト教徒のアラブ人の風習を紹介する。これらの人々は、煉獄にいる魂を救うための喜捨を乞うときに「アッラ・ルーア」と唱えるのだという。すなわちこの箇所でもーゼが言っているのは、混沌の中にすでに生命があったということになるのである。ベラスケスはそれを、シロキクラゲや、糸状の緑藻類、発光性の足糸のようなものと推定する。それらは動物でも植物でもないが、生きていて、刺激に対して感応する力をも持っているのだという。この箇所はよく読むと、実に危険な意味をはらんでいる。なぜなら、混沌の中にすでに生命体があったというのは、創造主が創り出す以前に、すでに何らかの生き物が存在していたということを意味するからである。

続いてベラスケスは次の節の説明へ移る。「エロヒムは言われた。『光あれ』。こうして光があった。エロヒムは光をよいものとされ、闇から光を分けられた。エロヒムは光を『日』と名づけられ、闇を『夜』と名づけられた。夕べがあり、朝があった。第1日である(492)」。ベラスケスは、恒星としての太陽がまだ存在していないことを指摘する。エロヒムが創造した光というのは、一点から照射されるような強いものではなく、彗星の周りに見られるようなぼやとしたものだったに違いないと彼は推測する。さらに、太陽が存在していないということは、時間の分割もまだ存在していないということの意味する。したがって、この「第1日」というのは、われわれが通常認識するような時間の区分ではなく、不確定な時の広がりとして捉えるべきだという。すなわちこの「光あれ」の一節は、天文学、光学、そして哲学的に解説されるのである。

このような調子で、第6日の人間の男女の創造までの過程が説明されている。これらの記述に共通して言えることは、天地創造は決して超自然的な出来事ではなく、あくまで自然の力によって達成されたということが強調されている点である。たとえば、創造主エロヒムが海と大陸とを分けるのに使った力は「北極の方に向いた磁力(493)」であるとされているのが典型的である。見かけ上は、エロヒムが主語となって、天地が創造されたような形が取られているが、その実、すべては自然科学や人文学を用いて解説することが可能だとされているのである。そこで次のベラスケスの言葉の解釈が問題となる。

モーゼは物理学者でも、形而上学者でもありませんでした。それでも彼の言っていることすべては、物理学と形而上学の極めて正当な考えと一致しているのです。ですから、モーゼの宇宙開闢説が靈感を受けて書かれたものではないなどという、神を信じない方がおられれば、どうぞ私にそれを証明していただければと思います(501)。

ここで読み取るべきなのは矛盾であろうか、それとも皮肉なのか。モーゼの語る天地創造の物語はすべて神の介入なしに説明することができる。その驚くべき理路整然とした整合性こそが、神の啓示の証左であるというアクロバティックな議論が構築されているのである。

ベラスケスが彼の「体系」をすべて説明し終えたとき、レベッカはまるでからかうかのように、彼の宗教に関する考えには何か頭を悩ませる方程式はないのかと尋ねる。この質問に対し、ベラスケスは幾何学者として「無限」の概念を用いながら答える。その理論はまた、おそるべき同語反復的な性格を帯びる。彼によれば、数学者は ∞ という記号を用いて無限というものを表すが、それは結局のところ何を意味しないのだという。なぜならば無限大というのは、星でいっぱい夜空が無限倍にあるということであり、無限小とは、原子の中でも最小のものを無限に分割していくことであるからである。それゆえ無限とは人間の器官では知覚できない何ものかであり、理解できず、言葉でも表すことができない以上、それについては判断を停止せざるを得ない。そこで導入されるのが神に関する概念である。「どのようにして、無限に偉大であると同時に無限に賢く、無限に力強く、また無限に善良で、あらゆる無限なるものを創造された方というのを言い表すことができますか？」つまり信仰と数学がともに最終的にたどり着く不可知に関する問題が再び姿を現すわけだが、それを解決するのもまた信仰と……そして数学であ

る。ベラスケスは言う。「ここで教会が助けをもたらしてくれます。というのも教会は、単一を壊すことなく、単一に含まれている3という数字を提示してくれるからです(512)」。三位一体に含まれる数の神秘。無限という人知を超えた概念は、実は3という小さな素数で表すことができるとされるのである。

ベラスケスの考えにおいては、数学をはじめとした学問と宗教とは決して水と油の関係にあるのではなく、むしろ高い親和性を示しているように見える。彼の体系についての説明をすべて聞き終えた小説の主人公アルフォンスは、これほど学識のある人物が、これほど宗教に敬意を払っているのを見て、心を打たれたと感想を述べている(513)。だが注意しなければならない。ポトツキにあっては、すべてが不確かである。無限にまつわる問題を解決する鍵であったこの三位一体による説明は、ただちに次のような言説によって形骸化される。すなわちこうした考え方は、イエス・キリスト誕生以前、すでにヘルメス・トリスメギストスの著作の中に現れているし、アレクサンドリアのフィロンがギリシア化したユダヤ人の間にそれを広めていたとされるからである。ドミニック・トリエールが指摘するように、三位一体に関する考えは、歴史の中に組み込まれることで、絶対的な聖性を失い、空洞化される¹⁸。そしてその次に来るのが、これまた解釈の難しいベラスケスの言葉である。

「いつの時代も、見かけは人間が行うようにして、至高の神のご意向が達成されるのです。おそらく神は雷鳴の中に自らの声を聞かせたり、星の夜に自らの掟を火を吹く文字で描くこともできたでしょう(512)」。だが結果的に、至高の神はそのようなことを行わなかった。結局は、神は人間を用いてその意志を達成してきたに過ぎないのである。超自然的な神の絶対性、神秘性は否定され、私たちはふたたび理論で説明可能な学問の世界に舞い戻る。

終わりに

18世紀ヨーロッパにおいては、一方に啓蒙思想の発展があり、もう一方に教会をはじめとした組織としての宗教の弱体化、さらには主に知識人の間での信仰の意義への問い直しがあった。近代的な合理主義、唯物論を前に、かつては冒すことなど考えられもしなかったキリスト教の価値は揺らぎ始める。ダランベールが『百科全書』に付した「人間知識の系統図」を見ると、学問は「神の学」、「人間の学」、「自然の学」の3つに分類され、いずれも「哲

¹⁸ Voir Triaire, art. cit., p. 377.

学」の下に置かれている¹⁹。すなわち、神と人間と自然とは並置できる存在であり、いずれも理性によって管理しうるものとみなされているのである。

19世紀に入ると、行きすぎた合理主義に歯止めをかけようとする動きが見られる。この揺り返しの流れを代表するのがシャトーブリアンであり、彼は、キリスト教は必ずしも誤謬の源泉ではなく、むしろ無信仰こそが人を過ちに陥れるのだと主張する。次のシャトーブリアンのヴォルテール批判の言葉に、その考え方ははっきりと見て取れる。「ヴォルテールがこれほど多くの間違いを犯し、文体や判断にむらを見せたのは、ただ彼が宗教という大きな歯止めを持っていなかったがためである²⁰」。理性も信仰も、いずれも真理へと向かおうとする点では同じであるが、あたかもその道程において必ず相手を攻撃せずにはいられないかのような感である。

ただここで、この時代に学問と宗教とは必ずしも厳然とした対立関係にあったわけではないということは指摘しておく必要がある。ふたつの領域の間には、中間地帯が存在しており、それはオカルト、錬金術、催眠術といったえせ科学を指す。ポトツキ自身、他の多くのポーランド人貴族と同様、フリーメイソンの会員であったが、それは石工の組合として建築学を起源に持つ、ある種の宗教的組織と考えることもできる。

しかし18世紀後半から19世紀初めにかけて生きたポトツキが、この学問と宗教の相剋という問題に強い関心を抱いていたことは間違いない。彼自身、歴史や年代記といった学問に生涯にわたって取り組み、熱心に調査と研究を行っている。一見すると、ポトツキ自身は学問の意義についてはつゆほどの疑念も抱いていないように見えるが、ただ『サラゴサ手稿』という彼の残した唯一の小説を読んでみると、その考えはあらためざるをえない。この作品に登場する学者たちが送る生涯の不幸、ベラスケスの体系に見られる痛烈な皮肉——ただしそれは学問だけではなく、宗教にも向けられる——などから考えると、ポトツキは少なくとも学問の意義についてはかなり懐疑的な考えを抱いていたのではないかと判断せざるをえない。

この点で、ポトツキは相対的にシャトーブリアンの考え方に近いようにも見える。ポトツキが学問に対して批判的になるのは、とりわけ学者の傲慢が問題となるときである。小説に登場するディエゴ・エルバスは、あらゆる学問に関する著作を執筆することを目論むが、超人的な努力の末に完成した百巻に及ぶその書物は結局ねずみたちの餌となってしまう、最後には彼自身、

¹⁹ « Système figuré des connoissances humaines ». Voir le site de l'ENCCEP.

²⁰ Chateaubriand, *Génie du christianisme*, op. cit., p. 646-647.

精神に異常をきたし、自死を選ぶことになる。ディエゴの息子プラスは祖父に育てられるが、その祖父は死ぬ間際、プラスに向かってディエゴの学識を強く非難し、父のように神を信じない人間になってはならないと諭す。「プラスや、人の知恵などというものには用心するがよい(348)」。他方、数学者たちの論争に匿名で加わり、ただ思索のためだけに思索を行う幾何学者ベラスケスの父エンリケは、「人知れず、孤独だが、甘美で混じりけのない(476)」喜びを味わうことができる。学問が真理の追求にとどまらず、自らの名を挙げる手段となると、ポトツキの辛辣な筆は冴えを見せる。

だがポトツキがシャトーブリアンと異なるのは、学問だけでなく、宗教に対してもまた距離を置くという点である。すでに指摘した通り、ベラスケスの体系は、天地創造の神秘を「科学的に」解説してみせることで、宗教の持つ聖性を破壊するわけだが、その手段に用いられるのが学問、すなわちポトツキが他方で批判している人間の営みであることに注意しよう。つまりポトツキは、一方で、学問をまるで人を神の領域に近づけるかのような思い上がった野心の道具と断じ、かえす刀で、信仰にまつわる神秘を、人知を用いて説明することが可能な旧時代的な因習とみなしているのである。理性は信仰に優るのか、それとも劣るのか。ポトツキはその論争自体を皮肉な目で眺めている。